

36. サルの生息域コントロール試験

利用環境と移動ルートの強制変更について

遠竹行俊

〔目的〕

サルの作物被害は、突然の出没と「群れ」という複数の加害によって引き起こされ、このことが多様な被害問題を引き起こしている。

そこで、サルの群れの被害防止方法の一手法として、群れの代表の捕獲、電波発信器の装着、電波利用による追跡、利用環境や移動ルートの把握、出没予測、出没直後の忌避剤暴露等を行い、利用環境と移動ルートを強制的に変更する試験を行う。

〔方法〕

サルの捕獲は、埋め込み式のワイヤートラップと金網製の箱罠を使用した。捕獲個体は1997(H9)12月以降に八王子市で捕獲した8頭とあきる野市の1頭、合計9頭であった。

追跡は、自動車等で電波を探し、装着個体を発見した後は、可能な限り目視観察と追跡を試み、移動ルートや休息場（泊場）を記録した。追跡した個体のなかで、約30頭で構成される群れの雌について、利用環境と移動ルートの把握、出没予測、出没直後の忌避剤暴露等の試験をした。この群れの追跡は、サルにとって生息条件が厳しい冬期とヒトにとって被害の多い夏から秋にかけての時期に集中的に行った。

利用環境と移動ルートの強制変更は、専業農家の栗園でトウガラシを破裂させて試験した。この試験は、出没地点で栗に被害を出し始めたことを確認した後、被害木の中央部にトウガラシ粉をセットし、サルの再来を待った。そして、発信器の受信を目安にサルの群れを待ち構え、加害したことを確認してから、サルの至近距離（約3m以内）で破裂させた。また、試験地に接近したサルの状況は、農家に受信機一式を置き、朝、昼、夕の3回メモリーしてある電波を受信して記録をした。

〔結果〕

追跡結果から、冬期の餌条件が厳しい時期（2～3月）の移動地域（図-1）は、6km×4kmの広い範囲の山林を特定のポイントを通過しながら利用していた。畑地への出没は稀であった。

冬期に対して夏から秋にかけての時期（8～11月）の移動地域（図-2）は、ほぼ直線的に約8km×2kmの範囲にある農地を多く利用していた。出没地点と出没日の関係を見ると（表-1）、③③'には、確認した出没回数が24回中10回であった。この地点は、山間地の最も奥の専業農家で山林に隣接した部分に約0.5haの栗を、山林から離れた日当たりの良い畑地の約2haにナスやカブ、花卉等を栽培していた。

この冬期と夏から秋にかけての時期の比較から、サルは季節的に明確な利用環境の使い分けをしていることが判った。

季節的に農地に執着するサルの忌避剤暴露試験は、9月5日、10月4、15日に行った。10月4日はサルが至近距離に来ない内に2回破裂させてしまった。残る2回は予定通り至近距離で破裂させた。この結果、群れは、地点③の南にある尾根筋のさらに南側の地域に移動してしまった。10月15日以降、群れは近くの林地③'に来ることがあったがこの栗園の300m以上離れた所を迂回するようになった。被害についても栗の収穫状況から昨年の加害時に比較して増収が確認できた。栗の収穫状況や追跡の結果等から推測して、利用環境と移動ルートを強制的に変更できることが判明し、今後の生息域コントロールの可能性が考えられた。

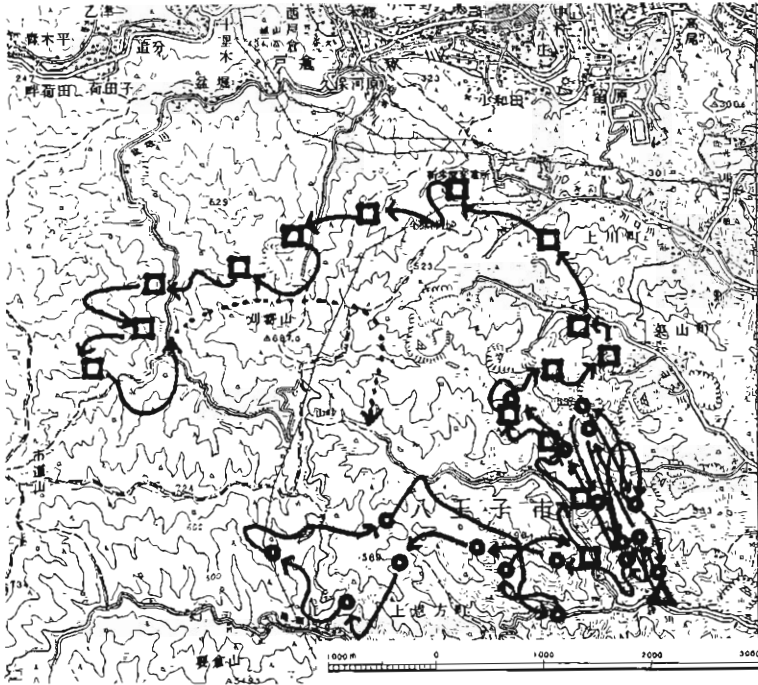


図-1 冬期の群れの追跡例

注：△；捕獲地点、○；2月の追跡例、□；3月の追跡例、→；通過コース
 追跡期間は、1998(H10)年2月1日～3月17日
 群れの識別は、発信器を取り付けたオトナ雌によった

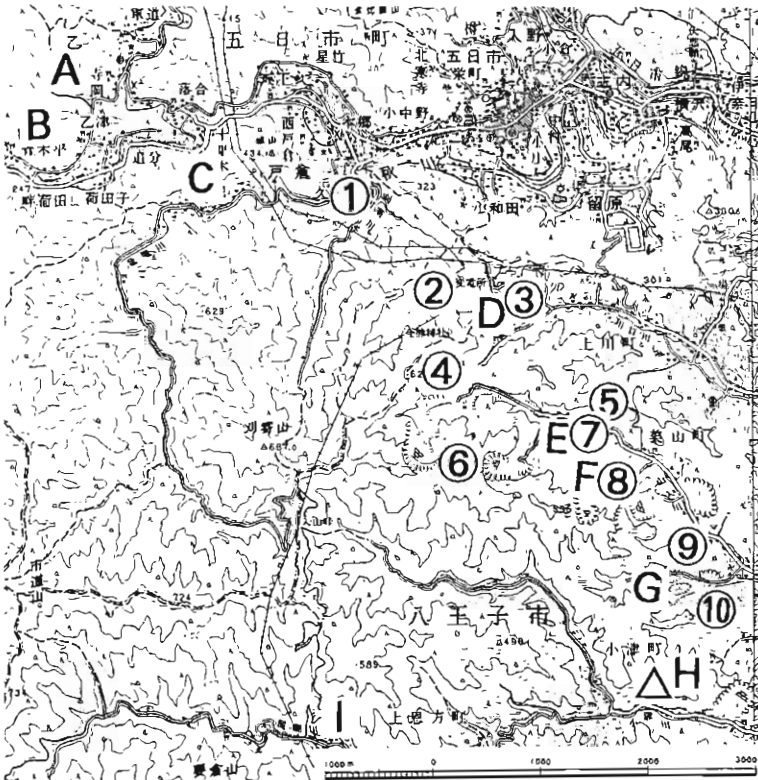


図-2 夏期～秋期の群れの追跡例
 (サルの出没地点と被害地点)

注：△；捕獲地点、①～⑩；出没地点、A～I；主な被害地点
 追跡期間は、1998(H10)年8月14日～12月1日の間
 被害作物は、ほとんど栗、一部野菜類であった

表-1 サルの出没地点と出没日

Month	出没地点									
	①	②	③③'	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
8月			20	21	22	23				
9月			28	31	2	4				
			10	16	17	18				
10月								19	22	
11月					25	23				
					9	14			30	17

注：出没地点①～⑩は図-2の数字
 ③③'は、③から約300m離れた地点
 追跡期間は、1998(H10)年8月14日～12月1日の間
 斜線は、忌避剤を暴露した日